

様式(細則 5-2)

平成23年 8月11日

浜田市議会議長 牛尾博美様

議員名 佐々木 豊治



調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 平成23年 7月31日 ～ 8月 3日
2. 視察又は訪問先
福島県相馬市、南相馬市
3. 調査経費 25,477円
旅費運賃 15,137円(レンタカー・ガソリン代)
宿泊費 10,340円(相馬市、新潟市)
4. 調査研究活動の概要
別紙のとおり



1日目（7月31日）

午後2時に浜田市役所庁舎に集合し、レンタカー（ワゴン車）に乗り込み7名で出発。

夜通し交代で運転し南相馬市へ。

2日目（8月1日）

8時30分 南相馬市のボランティアセンターに到着し手続きなど行いボランティア活動へ。

軽トラでのゴミの撤去などの片づけ作業を行い夕方4時に終了した。

3日目（8月2日）

8時に宿泊先を出発し相馬市など被災を視察。

9時30分より災害当初支援物資の拠点にもなった相馬中村神社にて、NPO法人「小さなアリの手」の相馬行胤（そうまみちたね）さん達から、これまでの支援活動などのお話を伺い、質疑や意見交換など行った。

午後、被災地の視察を行い、4時前より相馬市議会の議長と面会の後、相馬市長並びに担当職員から、震災発生時からのこれまでにいたる対応などの説明を受けた。

その後、新潟市に移動し10時前に到着し宿泊。

4日目（8月3日）

8時に宿泊先を出発し、夜8時半に浜田市に帰着した。

出発時は7名であったが、2日目の朝、相馬市で芦谷議員合流、その夜、川神副議長、平石議員の2名が合流し10名での活動となった。

今回のNPOや相馬市長と懇談できたのは、以前から人脈を通じた交流のあった笹田議員の尽力によるもので、それにより大きな成果が得られたものと思う。

NPOの相馬さんと、相馬市長の話から聞き取りした内容を抜粋で報告します。

NPO法人 相馬行胤さん

- ・災害発生当初は水も食べ物も無く、全国の地方自治体が送ってくれて本当に助かった。県や国からは何も支援が無かった。
- ・市長の方針がぶれなかったのが良かった。
- ・初動活動で50トンの物資が集まったが、ここ（相馬中村神社）で受けた物資は99%はけた。（冬物が一部残った）
- ・民間の支援事例としては、広島のパン屋さんが多くの社員を導入にパンを配ってもらって、非常にありがたかった。

- ・初めは行政は物資を受入れられず、「うわさで聞いた」と、ここに持ってこられた。
- ・毎日、市長と連携し、市でできないことも先行して行った。
- ・有事の時に必要なには強気リーダーシップ。市長も「市民を守るのが俺の仕事」といっていた。
- ・今後の復興は見えていない。我が街をどうするのか、市民一人ひとりが決める事であり、それをどう集約するかが大事。
- ・物乞い（金をくれ）では地域は発展しない。チェルノブイリは30年たっても何も変わっていない。水俣は50年かかった。福島は10年でなんとかしたい。

他

相馬市長

- ・震災から4ヶ月たち、少し落ち着いた。避難所に人がいる間は落ち着けなかった。
- ・役人は現状の制度のなかで何とかしようとする。
- ・死亡は450人だが、ほとんどの住民が助かった。その中であって、消防団の犠牲者が多かった。（消防団に助けられた）
- ・今回の死因は圧迫死だった。波に飲まれたら全員死ぬ。
- ・最低限の対応は出来たと思う。県や国の対応は極めて遅かった。それまで支えてくれたのは友人の各市長だった。
- ・被災直後に必要なのは水。避難所に入れたら一安心。
- ・災害対応は最初の24時間で決まる。その次は48時間。48時間で決めたことをずっと進めてきた。
- ・分厚い復興計画書を作るつもりはない。計画は毎年変わっていく。
- ・私はそれぞれの避難者と向き合っている。この震災でどうすれば良いか答えはいまだ無い。
- ・市の職員は非常に頑張った。

他

感想

2人の話から、相馬藩気質の住民の繋がりを感じた。

国や県からの指示ではなくて、実際現場を預かる責任者としての姿や責任を感じ取ることができた。

今でも市長の発案による、仮設住宅の孤独死対策のための「夕食の無料配布」や、買い物弱者を支援する「リヤカー行商」などの新たな取り組みも行われている。

必ず蘇って、復興していただきたいと強く願っている。